

われもまたアルカディアに

小牧, 健夫

<https://doi.org/10.15017/2558876>

出版情報 : 文学研究. 36, pp.37-43, 1948-03-30. 九州文学會
バージョン :
権利関係 :



われもまたアルカディアに

小 牧 健 夫

廣い學校の構内の一隅にある化學教室の窓の下には雜草がやけに茂つて、それが塀の外の本郷通りの砂埃りをいつもかぶつてよごれて白けてゐる。その草原へ私はよく晝の休みにMと一緒に來て、草の上に坐つて晝飯を食べたりいゝろんな話をした。

校庭にはもつと氣持のいい草地が方々にあり、クローバーが一面に咲いてゐたり、上野の森の向うに筑波が眺められるところもあつたけれども、わざわざさういふ誰も來ないやうなきたなく荒れた隅つこに休憩の場を求めたのは、そこに立つてゐる一本の樹のためであつた。

I 先生にドイツの詩によくある菩提樹リシトがそこにあると教へられたとき、Mと私はすぐ行つて葉をとつて本のあひだにはさみ、幹を撫でて樹のすがたを眺めたものだつたが、それからはその樹蔭が吾々の談話室のやうになつたのである。

Mは中學時代から吾々の仲間の俳句會で頭角を現はしてゐた。この學校へはひつてからまもなく、根岸庵に出入して月々の運座の席にも連なるやうになり、これも吾々の仲間であつたHと並んで、いつか少壯俳人として前途を囑目

されてゐた。それで菩提樹下の談話も俳句會のこと、先輩の俳人のことが多かった。

殊に私の心をはすませたのは子規さんが——さうMは先生の子規を呼んでゐた——かういふことを言つてゐたとか、子規さんにかうしろと教へられたとかいふ話だつた。そのじぶん私は子規の書いたものほもらすことなく讀んで、精神の榮養とし、また文學の道の導きの星ともしてゐたので、子規に親炙することのできるMを羨みながら、さういふ話をむさぼるやうに聞いた。

かうしてさらに碧梧桐や、虚子や、その他『ホトトギス』に名を列ねる人々がMを介して私の身ぢかの存在となり、その頃俳人のあひだにはやつてゐたと思はれる「感じがいい」とか、「振つてゐる」といふやうな言葉をMが盛んに使ふのに新鮮なひびきを感じたりした。

しかしMの話は俳句の世界にかぎられてはゐなかつた。鏡花が好きだつた彼は『湯嶋詣で』や『照葉狂言』を批評したり、繪畫の趣味もあつて白馬會の展覽會に行つて藤島武二の新しい色彩感覺に驚嘆したりした。獨歩の『武藏野』が出てMに深い感銘を與へ、印象的な文章を喜んでゐたこともあつた。

そんな話に耽つてゐるあひだに午後の始業のベルを聞きはづして、あわてて教室にかけこむときどきあつた。明治も三十年代になつて程經ぬ頃で、藤村が第四詩文集『落梅集』を公にし、犂牛が『太陽』誌上でニイチエの思想を唱道してゐた時であつた。學校といふのは一高のことである。

かういふ回想をそれからそれへと書いて行くときりがない。しかしこんなことを書き出したのには小野島さんの追

懐がからんでゐるのである。この『文學研究』で私の退職記念の特輯號を出す話のあつたとき、小野島さんはしきりに私に自敘傳風のをそれに載せるやうにすすめるので、私は取り立てて書くやうなこともないところだと、どんな事書いても吾々の参考になるのだからと眞摯な調子で言はれ、私はひたすら恐縮して返す言葉もなかつたのであつた。いかにも小野島さんらしい謙虛な態度が見られるのであつたが、これは一つには明治の文學に興味をもち、私のみずばらしい経歴も何かそれに觸れるところがあるのを期待してゐたのではなからうか。その後その特輯號に『草枕をぞろごと』を書かれたのを見てなほさう思はれた。私としてはさういふ挿話もあつて、こんなものを書き出したのだが、さて「取り立てて何も書くことがない」といふ感じは今も變りがなく、この上筆がすまなくなつた。

それにしてもかういふ回想の文を綴る機會に、色々と思ひ出してみると、明治の昭代に學生の時期を送つたことをつくづくありがたいことに思はずにゐられない。その頃の學生はともかくもおほやうな時代の懷ろにいだかれて、ゆつたりした氣持で學問にはげむことのできたのは、何はともあれ仕合せであつたといはねばなるまい。もとよりいつの世でも青年は人生の危機にのぞみ、思想的に懷疑し煩悶するのが常であり、また各自の境遇上からもさまざまの苦しみを受けるものが絶えないのは當然であるけれども、明治の頃は、後代、殊に現時とくらべれば、時代の重壓を感じることがほとんどなく、いはば空氣の中に生きるやうに、それを意識しなかつた。今なら直接生活上の苦しみを味はない學生でもたえず時代を意識しないでは居られないのである。

さういふわけであの時分の青年は、反語的な言ひ方をすれば、せつばつまつた悩みですら自分の魂の問題として苦

しむゆとりがあつたともいへる。そのかはり社會思想の方面でいへば、溫床に育てられて荒い氣候に觸れないやうな鍛錬の不足は争はれなかつたが、學問修業に専らなるべき學生にとつて、何といつてもゆたかに恵まれた時代であつた。咲く花の匂ふやうな今を盛りの文化の興隆期に際し、海外の新しい文物はどしどし採入れられ、目ざましい新興の機運に促されて、精神界も活氣が横溢してゐた。若い學生は或は、無教會の基督教を提唱して獨立自主の信仰を鼓吹する内村鑑三氏の門に入り、或は精神主義の旗幟をかかけて彌陀本願の教に清新な色を着けた清澤滿之氏の浩浩洞の扉を叩いた。その他各方面の學者が輩出して後進に向つて誘掖の手を差しのべてゐた。それらの人々は、後に細かに分化した専門の分野から見れば精到の點に足りないところがあつたかもしれないが、何となく輪郭が大きく、一種の風格をそなへてゐたことは學徒の指導により、適してゐたといへよう。かういふみづみづした寮園氣につつまれた時代をなつかしく想ひかへすのはひとり私ばかりではあるまい。

人間は年をとると、若い時とは逆に、未來への希望と空想が少くなり、過去の追懷が多くなり、つひには過去のみ生きるやうになるといはれる。しかし私は悔いばかりが嵩んでゆく過去の屑が年ごとに大きくなるにつれて、その亡靈にとりつかれるのが苦しくなり、なるべくこれを忘れようとし、強ひてでも未來を色々と空想することが却つて多くなつたくらゐだが、この頃のやうに世相が暗澹として來ると、ややともすれば過去の明かるかつた頃を想ひだすことが繁くなつたのは寂しい。しかもこれは老年の痴夢とばかりはいへず、今は誰でも何彼につけ戦争以前の、すべてさもつとよかつた時代を回想しないではゐられないのだらうと思はれる。

この前の世界大戦の後、私がベルリンに滞在してゐたのは、あのすさまじい悪性インフレーションが絶頂に達しやうとする直前であつたので、大抵の人は生活難に喘ぎ、殊に知識階級の困苦はよそ目にも痛々しかつた。或るとき銀行の窓口で書類に一九二二年と書くべきところを誤つて一九一二年として差出し、それを訂正しようとしたら、「なにそれで構はない、その頃はほんとに好い時代だつたが」と言つて笑つた。これはほんの冗談にすぎないが、さういふ回顧的感傷がしじゅう頭の中にこびりついてゐたから、それで咄嗟にこんな諧謔が口をもれたのであらう。實際、私がベルリンにゐたあひだに、下宿してゐた家の人たちからも、また識り合ひになつた人々からも、何かといふと昔のよかつた時世の話聞かされたものだつた。吾々の今日の心境から思ひ合せてみれば、それも無理のないこととしんから共感もされるのである。

この一文の標題としたアルカディアといふのは、ギリシアのペロポネス半島にある山間地方の名で、そこに住む牧人の純朴をもつて聞こえ、古來西洋の詩文に理想郷として謳はれてゐることは周ねく知られてゐる。「われもまたアルカディアに」といふ言葉は十六世紀のイタリアの畫家スキドローネが自作の畫面に書いたといはれ、ゲーテもこの一句を『イタリア紀行』の題詞とした。シルレルはまた『諦念』と題する詩の第一聯に「われもまたアルカディアに生れき」といふ句を疊みかけて用ひ、返らぬ過去の消え失せた幸福をしのである。

誰にしても自分の幼少の時代をわが心のアルカディアとしてなつかしみしたふものである。明治の時代は現代からかへりみてアルカディアのやうに思はれてはゐないだらうか。吾々のごとくその頃に青少年の時期をすごしたもの

が、それへ郷愁を感じるばかりでなく、今は一般に明治の世が近代日本のまだうら若い黎明期として憧憬の情をもつて回顧されてゐるやうである。

しかしかかる回顧もただむなしく今を悲しむ感傷であつてはならない。悲しむべき今であればこそなほさらにかかる感傷を折伏しなければならぬ時である。ゲーテは七十歳を超えてから或るとき「私は君たちの考へてゐるやうな意味でどんな追憶も認めようとはしない。それは自己を表現するみじめな仕方すぎない。吾々が遭遇する偉大なもの、美しいもの、意義ふかいものは、外から追憶され、いはば追ひ求められてはならない。それはむしろ初めから吾々の内面に織り込まれ、それと一つになり、新しいよりよきものを生み出し、かくて不斷に形成しつつ、吾々のうちに生きつづけ、創造するものでなければならぬ。回顧して憶れてゐられるやうな過去は存在しない」と言つた。また「現在は私の崇める唯一の女神である」とも言つた。現在に何の係りもない、現在に實を結ばない過去へのあこがれ、いはゆる廢址の感傷をきびしく拒絶してゐるのである。過去は今の生命を豊かにし、よりよきものを創造するために、ただそのためにのみ在るべきもので、追憶が活動の力を萎えしめる毒素となるか、それとも生産的な意欲を湧き立たせる酵母となるか、それは一に吾々の心構へにかかつてゐる。

シルレルの詩篇『諦念』の^{イデオロギイ}思想については種々の解釋が行はれてゐるが、ここではそれを穿鑿しない。しかしそこに言はれてゐる諦念は人間のいかにしても免れない宿命であり、殊に現時の吾々は或程度、徹底的な諦念に強ひられてゐる。この諦念を「仕方がない」といふやうな氣分の消極的なわびしいあきらめに終らしめるか、ゲーテが晩年に強調した「快活な諦念」の積極的な道德價值に高めるか、それも吾々の覺悟一つである。

世情のおそろしい混亂不安のうちに身を置き、國運のはげしい沈淪を悲しく體驗しなければならなかつたゲーテやシルレルののこした言葉は、その時代的背景に思ひ及ぶとき、一層ふかく現代の吾々の胸に迫つてくるものがある。ゲーテはまた『詩と眞實』の第二部の題詞に「青春時代に求めたものは老年になつて豊かに與へられる」といふ言葉をかかつてゐる。しかし菩提樹の蔭にMと語り合つたころの私の青春の夢は十の一も實現しなかつた。それにしても明治の先人が各方面に將來の發展の希望をかけて開拓した遺業は今となつてどれだけの結實を見たのだらうか。吾は今日さらに明治の時代を見なほし、繼承すべきものは受けついでこれを育て上げてゆく責任があらう。「回顧してただ憶れてゐられるやうな過去は存しない」といふ言葉の含蓄があらためて切に思はれてくる。